

コロナ禍におけるオリンピック関連報道の分析

～「小山田圭吾騒動」はなぜ起こったのか～

2020年に予定されていた東京オリンピックは、世界的に感染が広がった新型コロナウイルスの影響を受けて翌年2021年に延期され、競技は2021年7月23日から8月8日にかけて開催された。日ごとの新型コロナウイルス感染者は減少することもなく、東京2020五輪は開幕日直前まで開催されるかどうかさえ不確定な状況であった。しかしながら、東京2020五輪組織委員会（以降組織委員会とする）は2021年に五輪を開催するという方針を貫き、ほとんどの会場で無観客という選択を行い、予定されていた33競技をすべて終えた。

大会開催に先立つ2020年7月14日、五輪の開催直前に組織委員会は開幕式の担当者を発表し、世界的なミュージシャンである小山田圭吾氏が作曲担当の一人であると発表した。この発表直後から、小山田氏は開幕式を担当するのにふさわしくないとするネット上の炎上や、それに追随するマスコミ報道があり、それを受けて小山田氏は作曲担当を辞任した。辞任から約2ヶ月後、マスコミやネットユーザーなどから批判された内容について、小山田氏は自身で釈明する公式文書に発表した。本稿の目的は、東京2020五輪の作曲担当として抜擢された小山田氏が辞任した経緯を振り返り、この騒動では何が起こっていたのかを整理し考察することである。小山田氏は加熱したネット炎上や政治的な思惑、大手マスコミによる不確かな報道の被害者であり、彼が行ったと思われる行為の報いをはるかに超えた、凄まじいバッシングを受けた。このような凄まじいバッシングの理由について、最も大きい要素は東京2020五輪である。大手マスコミによる不確かな報道やフェイクニュースと言っても良い程の悪意に満ちた記事、バッシングを楽しむようなネットユーザーなど、この事件が起こった要素を検証し、このような事件を二度と起こさないためには何をすれば良いのかを考察した。その結果、東京2020五輪の騒動を背景に、小山田騒動の発端となった二つのインタビュー記事を中心に分析した結果として、大会関連組織への批判の高まりや、インタビュー記事の読まれ方や記事の使われ方に問題があり、参照の有無を明言せずに、誤った主張をする報道があったことがわかった。残った課題として小山田を批判する人の特徴とパターンの研究やインターネットの反響のデータを考察すると異なる切り口でより分析することができると考えられる。